■親は親らしく、子は子らしく

このやうな訳で、「子が良くなるのも悪くなるのも凡て親の所為」であるが、ここで“躾”について一言したいと思ひます。ヨーロッパでは、イギリス型とフランス型といふ言葉でよく対比されますが、前者は「鞭を惜めば子を駄目にする」と言はれるやうに体罰を是認する厳しい躾を言ひ、後者は体罰を否認する躾の代名詞です。所が、フランスの母親たちのアンケートに拠ると、「親に対して無礼な言動があった時」には体罰を行ふ母親が多いのです。これを見逃したら親の権威が失墜し、家庭の秩序が乱れ、教育の基盤が失はれる、と考へてゐるからです。

これに反して、日本の母親たちは、どうでも良い事には叱ったり口喧しいのに、「お母さんの馬鹿」とか「お母さんなんか死んでしまへ」といふ暴言を聞き捨てにしてゐる者が多いのです。恐らくそのやうな暴言を吐かせる原因が日頃の母親の言動にあるのでせう。もしもさうであるならば、今後は絶対に無いやうに自省する必要があります。論語に「父父たり、子子たり」とありますが、親が親らしくあれば、子は自然と子らしくなるものです。親に暴言を吐くやうな子は、きっと親から「馬鹿」と嘲られたり「死んでしまへ」と罵られたことがあったものでせう。親はこのやうな「親らしくない」言葉は絶対に使ってはならないのです。そして、子に対して「決して口にしてはいけない言葉がある」事をよく理解させてやる責任があるのです。